

もくじ

みんな
月刊ねつと

2017年
1月号

通巻第117号

【表紙の絵】 織田信生

- 新年のごあいさつ 1
知っておきたい精神保健福祉の動き 2

特集

東京ソテリアにおけるイタリア交流事業のとりくみ

(塚本さやか・増川ねてる・栗原和美) 6

精神科医療の現状と改革の展望

【連載第10回】精神科医療はどうあるべきか (氏家憲章) 18

街の診療所からのお便り【連載116】(増本茂樹)

…人の悩みは、人それぞれですから、聞いてみないと分かりません… 22

知ることは生きること

(連載13回)障害年金《経済的支援特集⑦》(高橋裕典) 26

真澄こと葉のつれづれ日記 (第70回) 32

私と家族の手記「私の家庭」(N子) 34

みんなのわ——読者のページ・地域の話題 37



新年のごあいさつ

謹んで新春のお喜びを申し上げます



昨年はみんなねっと設立 10 周年に当たる節目の年でしたが、精神保健福祉分野でも大きな動きがありました。反面、相模原事件が多くの人に衝撃を与えたことも記憶に新しいところです。

政策面では、一昨年から続いていた総合支援法施行 3 年の見直し、また昨年始まった改正精神保健福祉法の施行 3 年の見直し、第 4 次障害福祉計画の策定等が議論されました。当会でも、医療保護入院における家族同意要件の廃止をはじめ、精神保健福祉における諸課題を社保審障害者部会、内閣府政策委員会等で意見表明しました。

また、交通運賃割引格差是正の国会請願署名を全国的に展開し、集約した 62 万筆余に及ぶ署名簿を携え衆参両議院に請願しました。採択には至らなかったものの、各地で精神障害者も割引の対象となるところが出てくるなど成果も生まれております。本年度も引き続き国会請願を行うなど運動を継続していきたいと思えます。家族支援（メリデン版訪問による家族全体支援）では昨年末に事業活動をさらに発展継承させる新たな準備組織が誕生しました。

本年は、引き続き精神保健福祉法の 3 年後の見直し及び障害福祉計画の策定が行われています。また内閣府政策委員会にも飯塚理事が委員として新たに参画することになりました。そのほか各種委員会等で積極的に意見を述べてまいります。

もとより、残された課題は山のようにです。医療保護入院における家族の同意要件、他科診療の医療費助成、障害年金、障害種別間格差、…数え上げればきりがありませんが、全国の皆様のお知恵お力を拝借しながら、解決に向け役職員一同力を注いでまいる決意です。本年もどうぞよろしくお祝い申し上げます。

公益社団法人 全国精神保健福祉会連合会理事長 **本條義和**



東京ソテリアにおける イタリア交流事業のとりくみ

特定非営利活動法人東京ソテリア 塚本さやか・増川ねてる・栗原和美

特集

1. 企画の概要

東京都江戸川区で活動している特定非営利活動法人東京ソテリアでは、2011年より都市交流ツアーを開催しています。東京ソテリアは2009年に東京都江戸川区で設立された特定非営利活動法人で、現在、グループホーム、地域活動支援センター、就労継続支援A型事業所、ホームヘルプステーションを運営しています。主に精神障害の方を対象とした支援を行っており、地域精神保健分野で活動する我々が、地域を超えた交流の中で学びをもつことはもとより、地域を越えた当事者間の交流の場を生み出すことを目的

に行ってきました。2015年度においては、2013年度に交流をもったイタリア・ボローニャから日本に招聘しての交流をおこないました。そして2016年度、ふたたびボローニャへ、今度は公募を含む総勢36人での訪問を果たしました。36人の内訳は、精神障害をもつ当事者が9人、精神障害をもつ方のご家族10人、地域精神保健の支援職が13人、その他医師が1人、大学教授1人、その他1人、です。

1992年以来毎年10月10日が世界精神保健デー・World Mental Health Dayと定められ、世界精神保健連盟 WFMH が中心となって、メンタルヘルスに

《主な交流先》

●行政組織

AUSL di Bologna DSM (エミリア・ロマーニャ州立地域医療連合公社 ボローニャ精神保健局)

●就労及び日中活動サービスを運営する協同組合

協同組合 AssCoop / ARCI di Bologna 協同組合 / Arcobaleno 協同組合 / Providone 協同組合 / ロンディーネデイケアセンター / カーザセツキオデイセンター

●居住施設

REMS / アルチペラゴ居住施設 / AITSAM

●地域精神医療

Zanolini 管轄地区精神保健センター / SPDC (精神科診断および治療サービス)

●その他

サイコロジオ放送局 (精神障害をもつ方が運営する放送局) / イルファロ新聞編集室 (精神障害をもつ方が運営する新聞編集室) / アルテ・エ・サルゥテ劇団 (精神障害をもつ方が役者として活躍する劇団) など

ついで意識啓発と偏見をなくするための活動が行われています。地域精神保健福祉の在り方の検討が進むなか、当事者(精神障害者)と家族のニーズを知ることとは重要な課題となっています。今回はイタリアボローニャ県か

らの招聘を受け、日本からこの課題に対する取り組みを伝える企画をおこない、望ましい精神保健について話し合い、当事者主体の地域精神保健を推進することを目的としました。主な交流先は左記のとおりです。

また、今回の事業に関し、在イタリア日本国大使館より、日伊国交150周年事業認定を受けただけでなく、以下の機関の方々に後援をいただきました。

(公益益社団法人全国精神保健福祉会連合会「みんなねっと」/きよ
うされん/特定非営利活動法人
全国精神障害者地域生活支援協
議会「あみ」/認定特定非営利
活動法人地域精神保健福祉機構)

*

今回の企画の参加者については、法人としても初の取り組みとなる、「公募形式」を取り入れました。法人の利用者および職員以外にも、ホームページ上で広く公募し参加希望者を募りました。結果、東京より21人、

愛知県より13人、北海道より1人、沖縄より1人の参加者がありました。また公募の結果として、みんなねつとにかかわりのある方が多くいらっしやっただけ、今回この紙面にて、本事業について報告させていただく機会を得たところです。

2. 当事者の目線

今回、本事業で大きな目的に据えたのが、医療主導型ではなく、地域の中で障害をもつ当事者があたりまえに暮らせる「当事者主体の社会」をつくることです。大きなことのように思えますが、ユーザーがサービスを評価し選択するのは当たり前のことです。しかしながら精神科

医療においては今までその文化が醸成されてこず、患者は医療の下で結果として主体性をなくし、世界に類を見ない精神科の病床数や長期入院といった社会現象に現状が反映されているのでしよう。地域における精神保健のあり方が問われている今、入院中心主義から地域ケア中心へと展開し、地域精神保健センターをはじめとする地域サービスによって支える仕組みを実践するイタリアから、そのヒントを学ぼうと、本事業を企画しました。これまでは、日本からイタリアへの視察も、イタリアから日本への招聘も、これもまた医療者や研究者が中心でありました。今回は、精神障害者当事

者が直接現地を見て、感じ、考えたことを日本に持ち帰ることを第一の目標に据えました。

ここからは、実際に参加した方からの声を引用し、紹介していきますと思います。小林さんは、ポロニーヤでの視察で特に芸術活動への取り組みに親和性をもち、ご自身の体験とあわせ、以下のような文章を寄せてくれました。また、渡邊さんご自身のデイケアでの体験を踏まえ、日中活動の場所でおこなわれていたバンド活動に感銘を受けたようです。

*

■小林賢次……………

油絵を描くきっかけは、東京ソテリアの職員のKさんが子供

の頃から好きで油絵を描いていたからだ。キャンバスとか油絵道具など一式を購入してきてくれてからである。僕自体油絵を描くのは中学3年生の時、学校の授業で描くぐらいだったので、それ以来全く描いたことがなかった。東京ソテリアが運営する地域活動支援センターは

るえ野で油絵サークルが立ち上がった。ちなみに僕がサークルの部長になってしまった。そこまではいいが、サークルで描かれた絵がなんとイタリアのボローニャで展示されることになったのだ。2か月後に、油絵計五枚がボローニャデビューすることになった。精神保健デーの催しで僕の絵が2枚売れた。

その前日、Civibo onlus 協会の会長より僕に陸橋の壁面に絵を描いてほしいというオファーを受け、富士山がいいといわれたが、あまりにも典型的であることとボローニャでは魚屋があまり見かけられないので、あえてマグロの絵を描いた。

ボローニャを一人で歩いた感想だが、日本は世界第3位の経済国であるが、ボローニャには24時間のスーパーもないし、夕方には定時に帰宅する様子も見られた。夏にはバカンスもあるようである。食料品も安いし、それほど大きな車も乗らないようである。それでも東京よりも暮らしは楽なように見えた。ボローニャの暮らし方を日本人が

学べばメンタルヘルスの問題も大分少なくなるのではないかと感じた。街の中心部へ行くとき方向を教えてくれた二人の女子学生、老夫婦、イタリアは怖いという人がいるが、ボローニャに関してはそんなことは一つもなかった。街はオレンジ色に統一され、なぜか芸術品の中にいるようだ。イタリアで必要な言葉はグラッチェとチャオだけ。他にはなにもいらぬ。本当にボローニャが好きになってしまったようである。本当に楽しかった。またいきたい！

*

■ 渡邊淳・・・・・・・・・・・・・・・・

タツソディケアセンターに行き4人グループのバンドの歌を

聞きました。個人のファッショ
ン・情熱を大事にしている、そ
れが生きるパッションだそうで
す。ボーカルの人はそれぞれに
その領域があると主張しました。
領域とは、自分が主張するところ
は主張し、主張しすぎたら他
のメンバーに迷惑がかかる
と言っていました。私のダイケア
はカラオケに行きますが、ボロー
ニヤにはカラオケがなくコン
サート形式で歌っています。バ
ンドを組んだ当初は恥ずかしく
歌も歌えなかったそうです。最
近では野外でショーをしている
みたいです。私のダイケアでは
グループになって物事を形にす
ることはなかったです。個々に
領域があり、個人のスタイルを

大事にしながらお互い主張を認
め合い、音楽として形にする
ということが凄いと感銘を受けま
した。

3. 支援者の目線

今回の企画では、支援者も障
害をもつ当事者も対等に「一参
加者」として企画に参加してい
ます。困ったことはお互いに共
有し、助け合う中で、はじめて
各々の主体性が芽生えると考え
ました。36名の大所帯を率いる
スタッフとしての責任を担いつ
つも、対等性を重視し接する、
支援者としての在り方を問われ
る、職員としても良い経験、そ
れ自体が良い研修となりました。

*

■特定非営利活動法人東京ソテリア
中島吾木香・・・・・・・・・・・・・・・・

「役割や立場を超えて」

プロビド―ネ協会での体験で
す。普段、専門職として当事者
やご家族と関わることが多い私
ですが、そこには見えない境界
の存在を感じることもありまし
た。プロビド―ネでの交流を通
して、国籍・当事者・家族・支
援者等という社会的な役割や立
場を超えて、「一人の人として
関わる」という、当たり前で自
然なことの大切さを改めて感じ
ることができました。誰しも、
家族であり当事者であり、支援
者にもなり得ます。

それぞれが自身の課題を抱
え、向き合い、受け容れていく過

程の中で、互いに自分の経験を語らい、そばにすることで、孤独から解放され、希望を感じられる。その瞬間を参加者全員で共有できたように思いました。

*

■特定非営利活動法人東京ソテリア
横倉裕子……………

自動販売機ひとつにしてもコインを入れて物が出てくるまでの時間は長く、お釣りは出てきてもサンドイッチがケースの中でひっかかり、今食べたいのに明日の朝まで担当者は来ないので 手に入れることができない。そんなちよつと不便がいつぱいな国イタリアをわずかながら知る機会が与えられ、交流会を通してお互いを興味深く見て、感

じて、知ることができました。同じ目的を持って協力し合う事が横の繋がりを強め、問題が起きても仲間と共にいる事でいつもよりもっと笑って、もっとやさしくなつて、いつもよりお互いを心配していました。喜びも思い悩みも、もしかしたら、いつもより何倍もみんなで分け合えていたかもしれませぬ。いつもと違う環境でいつもと違う仲間と新しい結びつきができた素敵なツアーでした。

4. 家族の目線

今回の企画には、家族の立場での参加も多く、親子で参加していただいた方もいます。異国の地で、少しだけ家族と距離が

できたとき、家族のありがたさ、あたたかさ、「ホームシック」だけでは片づけられない思いが胸をよぎります。私たちがボローニャの地で学びながら、その学びを還元させたいのは、目の前にいる大切な「だれか」なのだと思えます。

家族からは多くのメッセージをよせていただきました。せっかくなので、少しずつですが紹介したいと思えます。

*

■**土田ノブ子**……………

2 回目のイタリアボローニャで世界精神保健デーがありました。ボローニャの精神保健局長、精神科医師、当事者、家族会の方達が話し合っていて、とても